

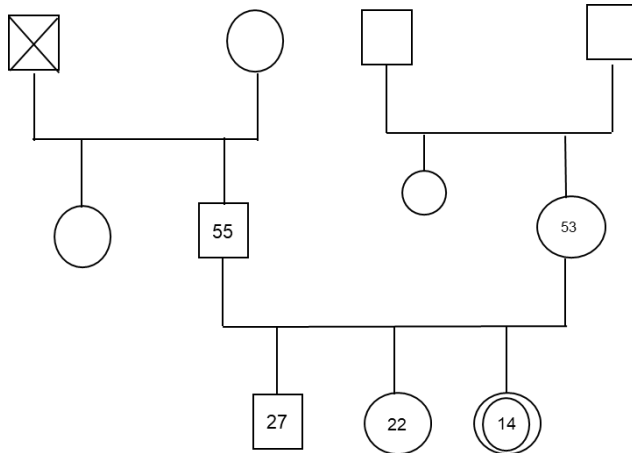
一時保護をきっかけにセーフティ・ミーティングを重ね、  
『もう、家族で話し合っている』という言葉によって終結した事例  
～家族と担当者へのインタビュー～

はじめに

本事例は、「職権により一時保護をされた家族は子どもの安全・幸せをめぐって児童相談所といかに協働していくのか」というリサーチクエッションに基づき、家族、担当児童福祉司にインタビューさせていただいた記録の一部を掲載しているものです。インタビューは、非構造化面接であり、自由な語りを促しています。サインズ・オブ・セーフティで行われる「理解的問いかけ」と同様な質問で、対話が展開していますが、一部「リサーチ」を念頭に置いた質問も含まれていることをご容赦ください。

本事例には、サインズ・オブ・セーフティの構造化されたプロセスは紹介されていません。また、事例の詳細もデンジャーステイトメント、セーフティゴール、セーフティスケールも示されていません。それは、私が事例に関与したのではなく、事例の終盤でインタビューアールとしてかかわらせていただいたという事情によります。しかし、そのインタビューの中で、家族や児童福祉司から教えていただいたことが、サインズ・オブ・セーフティが目指している家族が主体者となって子どもの安全を創っていくということにつながっていることから、家族、児童福祉司の言葉を届けることとしました。

本児の「もう、(児童相談所に)通わなくて大丈夫」という言葉、お姉さんが、家族を代表して「もう、家族で話し合っている」「バラバラだった家族が今は一緒に生活して、これからは、一緒に生活して話し合いをして、これから何かあっても話し合い、話ができると思う」と語り、児童福祉司が「あ、これが、このために家族に主体的にやってもらうっていうことは必要なんだな」感じるまでのストーリーを、インタビューの行間から読み取っていただけることを期待します。



## (1) 実践の概要

両親と兄、姉、中学生の娘の世帯。兄は、成人して、海外で生活している。姉も、成人して独立している。

お母さんは本児を連れて長期間にわたって家出をし、学校に通わず、各地を転々としていた。警察のかかわりから児童を一時保護することができたが、本児の前歯はなく、下着もひどく汚れていた。

保護当初は自ら声を発することもなかった。その後、一時保護所での生活にも慣れ、徐々に会話もするようになった。初めて学ぶ英語の勉強に戸惑いながらも、学校に通いたい、家に帰りたいと訴えるようになった。両親、本児とのセーフティ・ミーティングを何度も重ねた。

セーフティ・ミーティングでは、サインズ・オブ・セーフティによる安全づくりがなされた。マッピングにより、今ある問題が継続した場合の子どもの将来の危険の可能性が共有された。また、セーフティゴールは本児の心身の回復はもとより、実母が家出をしようとしたとしても、本児を巻き込まない仕組みについて話し合いが重ねられた。そして、この危険を回避するための安全プランをセーフティ・パーソンと作成することが求められた。

また、セーフティ・ミーティングでは、その時々課題を共有することと、家族だけで話し合いを行うファミリータイムが継続して行われた。家族は、今回の出来事を親族等に話すことを頑なに拒否したが、当時家を出ていた成人していた姉をセーフティ・ミーティングに出席してもらおうとした。家族と一定の距離を取ることで、自身の生活を守っていた姉がセーフティ・パーソンに加わってくれたことは姉にとっても、大きな決断であった。

その後、セーフティ・ミーティングを重ねる中で、家庭復帰を目指す事となったが、帰宅後の安全な生活のための準備期間の確保、家出中に通えなかった学校生活に段階的に慣れていくことを目的に、一旦は里親委託として家庭復帰を目指すことが合意された。

本児は、適応指導教室に通い、これまでの何年かを取り返すように様々なことを学んでいった。里親宅では、上手にコミュニケーションがとれず、あいさつなどの会話が交わせず緊張する場面もあったが、里親の暖かいかわりの中で、穏やかな日々を取り戻していった。

本児は両親とも、面会を重ねて、外出、帰宅と段階的な交流を重ねた。また、家を出ていた姉も、自宅に帰り、セーフティ・ミーティングに参加し、家族のセーフティ・パーソンとして重要な役割を担ってくれるようになっていった。

お母さんとの個別面接を何度も行った。お母さんは、本児の不登校とこれに伴う夫婦間のコミュニケーションのストレスが、家出の背景にあることを話すようになっていった。

家族と本児の交流が進められる中で、お母さんが再び家出することがあったが、本児がお母さんと一緒に行動することはなかった。この時点では、本児はまだ里親委託中であったため、どれだけ実母からの働きかけがあったかは定かではないが、姉とのつながりが、母の家出に本児を巻き込むことを防いでいると考えられた。

そして、お母さんはしばらくすると家に帰り、何事もなかったように再びセーフティ・ミーティングに参加するようになった。

家庭復帰の時期が検討されるようになった。姉が加わったことによる新たな家族のネットワークと、相変わらず寡黙ではあるがたくましく成長した本児については、たとえお母さんに誘われても断ることができることを、担当者は確信していた。

家庭引取りが実現したのは、保護から1年が経ってからであった。それから更に1年間、家族はセーフティ・ミーティングに参加した。そして本児の「もう、(児童相談所に)通わなくて大丈夫」という言葉があって、終結となった。本児は高校生になっていた。

## (2) 家族に対するインタビュー

家族全員と終結の時期にインタビューを行い、一時保護の体験と、児童相談所のかかわりについて聞いた。家族に対してのインタビューだったが、家族員同士で会話が交わされることはほとんどなく、面接者と家族メンバーの1対1の対話としてインタビューが進んだ。インタビューを受けている以外の家族メンバーは静かに話を聴いていた。以下に抜粋した逐語録を示す。

### ● お父さんとの対話

<今回のことはどのような体験だったのでしょうか>

「なんか自分(お母さん)だけが悪いことしちゃったって感じで、そういう思いが強くなっちゃって、自分を責めることしか無くなっちゃみたい感じで、・・・精神的にかなり本人(お母さん)は追い込まれているんだなと思ってましたけれども。その辺がちょっと、少しかわいそうだなと思いましたけどね。」「私もまあ、少し足りない部分はあったと思うし、お互いに足りない部分はあったんだけど、ただそれを本人(お母さん)は自分一人がそういうことになって」

<あの時は、お子さんとどうしようと考えていましたか?>

「本人と話して、いろいろもう、要望もあると思うんで、いろいろ聞き出して本人が、なんていうのかな、楽しく生きれば、生活できればいいのかな、と親は、ちょっと話し合いの場を持って、いろんな意見を聞きながら一緒に生活、人並みの生活が出来ればいいなとは思ってましたけど」

<児童相談所とのかかわりはどんな意味があったのでしょうか?>

「子どものことに対して、親として何をすべきなのかと、児童相談所の方はそれに、その子に対してどうしたらいいかと、その子に対しての共通の話題が、共通っていうことが、ちょうど維持できたのかなって。」

<家族がここまで頑張ることができたのはどんなことからですか?>

「少しずつでも、親子関係を取り戻せるという気持ちがあったから、児童相談所の方と多少話し合いの中で、ちょっと嫌な思いしたりとか、させたたりとかあったかもしれないですけど、そういう子どもを頼むってような考えがあったからこそ、今までついてきたのかなと思いますけど」

<他には、どんなことがありますか?>

「あの時、連れてきてもらったりとか(家族の祝日の外出に他県まで職員が付き添ってくれたこと)、結構やってもらえたんで。そういうことを考えたらやっぱりまあ、多少、語弊はあるんですけど、うちのことを考えられて行動してくれてるんだなというような、そういうので。」

<児童相談所に対しての不満はありましたか?>

「あの、なかなか連絡が来ないとかね。いつなら電話かかってくるのかなとか、次回いつなのかなとか、この前この日って先に言ってたのに、なかなか答えが返ってこないとか、そういうのがあったかな、と思いますけど。」「そうです、ちょっと間が空いちゃって、どうしたのかなってというふうに考える時があったという。もう私のほうで、その返事を待ってるよりも自分から電話したり、してると思うんですけどね、そのへんちょっと。」

<今回のことで、ご家族の何が変わったのでしょうか?>

「いろいろと、でもあれでしょ? 身の回りのこととか、前よりはちょっと、ああしたほうがいいんじゃないのって、あれ以後、話すようになったんじゃないかなと思うけど。思うけど、ね、あまりそういう話も無かったような気もするけど、まあ逆に遠慮勝ちなんで、娘なんだけど遠慮がちなんで、逆に言えないところがあって、みたいで、ちょっと言うのやめて。でもそういうの、壁が少し無くなってきたかな。」

お父さんは、お母さんがひどく自責的になっていることを気遣い、母子の家出、一時保護されたことについて、父親としての責任の一端があることを述べている。子どもに対しても、子どもの希望が叶うように親として責任を果たしたいという。児童相談所との取り組みにおいて意味があったのは、「共通の話題」ができた、と述べている。「共通の話題」とは、幾度となく行われたセーフティ・ミーティングの中で、家族が同じテーマを話し合ったことを指している。そして、困難な状況にあっても、「親子関係を取り戻せる」期待があったから、頑張ることができたと振り返っている。

## ● お母さんとの対話

<お母さんにとって、今回のことはどんな体験だったのでしょうか>

「つらさしか無かったですね。」

<つらさとはどんなことでしょうか?>

「やっぱりね、私がしたことであんな事になって、申し訳なさと、やっぱり(子どもと)会えないつらさ、悪いの分かってるんですけど、(児童相談所から面会はすぐにはできないと)言われちゃうと、なんで?っていうか。」

<お子さんと会えないことはどう感じておられましたか?>

「それはまあ、仕方無いのかなっていうのがありましたね。つらくても。今思えば、ああそのほうが良かったのかな、っていうのがあります。」

<そのほうが良かったというのはどんなことでしょうか?>

「会えなかって、考える時間も持てますし。」

<不安はありませんでしたか?>

「うーん、不安っていうか、もうあの時は、かわいそうでしょうがなかったですよ。まだそこまで不安なこと考えなくて、本当にただの感情ですけど、かわいそうだな、かわいそうなことをしたな、っていうのがずうっと思ってますけど」

<かわいそうなことをしたと言うのは、一時保護のことですか、それともその前のことですか?>

「それも、前のこともありますけど、その、保護所の方に行ったときも」

<これからお子さんとどうされたいと思っていたのでしょうか?>

「母親としてちょっと、なんて言うのかな、これから帰ってきて、この子が生きやすいように、生活しやすいように、学校に行きやすいようにしようと思いました。」

お母さんは、父親の話をうなづきながら聞いていた。寡黙で多くは語らなかった。子どもと会えないつらさを訴えながらも、仕方のないことであると話した。さらに、会えない時間が考える時間」となったと言い、子どもに対して「本当にかわいそうな思いをさせた」と述べた。本児とは、父親の言葉に同調するようにこの子が生きやすいように、生活しやすいように配慮したいと話した。

## ● 本児との対話

<お母さんに会えるまでちょっと時間がかかりましたよね？>

「そうですね、最初はやっぱり会えなくて、うん、ちょっとつらかったですけど、でも1回離れて考える時間が持てたのは、良かった。」

<その時に離れて考えたのは、どんなことですか？>

「そうですね、離れて……、家族の、なんだろう、これからどうやって暮らしていくのかなとか、そういうふうに考えてました。」

<不安とかはありませんでしたか？>

「そうですね、不安もありました。」

<児童相談所がかかわったことで役に立ったことがあるとすればどんなことでしょうか？>

「うーん、ミーティングとか、それからこの家族、意見を言い合うみたいなことが、今まで無かったんで、そういうんで良かったと思います」「話題ですかね。いろんなこと話し合えた。話し合えること、ですかね。」

<大変なこともたくさんあったと思いますが、どんなことで頑張れたんですか？>

「んー、家族と離れてて、その離れてる間に家族のこといろいろ考えてる時間が、出来たので、それで頑張ってみようかなっていうふうに思いました。」

<他にはどんなことがありますか？>

「そうですね、いろんな人と出会って、相談とかいろいろ意見を聞けて、いろんな意見があるんだなというふうに、勉強になりましたね。」「そうですね、〇〇さん(児童福祉司)……、〇〇さんは最初のころからずっと同じ、〇〇さんが担当してくれてるんで、いろんな話が出来るようになってきて、良かったです。」「〇〇さん(児童心理司)とは結構、いろんな相談ごととか、こうして、いろんな意見を言ってくれたので、とっても勉強になりましたね。」

本児も、離れたことで家族のことを考える機会になったと述べている。家族のことを改めて考える時間ができたから頑張れたという。また、家族でこれまで、いろいろなことを言い合うことがなくて、話し合いができたことがよかったと述べている。いろいろな人との出会いの中で、相談ができたことがよかったとも話した。

## ● お姉さんとの対話

<今回の一時保護についてはどう思われましたか？>

「お母さんと妹が1回離れて、お互いの考える時間とかあったほうが、いいなと思いました。正しい行動だろうな、と思いましたけど。」

<今回の出来事を通じて何が変わったのでしょうか？>



「そうですね、今まで家族4人で意見言い合うっていうこと、今まで無かったんで、セーフティ・ミーティングして、そういう一人ひとりの意見聞いて、ああ、そういう考えもあるんだって、そういうんで結構、前向きに考えるのがすごく。」

<新しい家族作りに、役に立ったものは何ですか？>

「コミュニケーションを大切にする・・・、(今は)結構毎日のように話してるんで。」

姉も、母子がはなれて、お互いのことを考え、時間が持てたことがよかったと述べている。家族4人で話し合うことがなかったが、セーフティ・ミーティングの機会があって、前向きに考えられたと言った。

### (3) 担当者に対するインタビュー

<どんなことからでも良いのでお話ししてください>

「そうですね。親には返さないって誓ってスタートしましたけれども・・・」

<返さないって言うふうに思ってたのが、家庭復帰できたのはどんなことがあったからでしょうか>

「〇〇さんのところをマッピングでスタートして、すごく〇〇のところには、他の人たちも分かりやすかったりっていうのもあるんですけど、〇〇さんのお父さんには、いや、お母さんには特に分かりやすかったなと思っていて。そういったことを通して、自分たちがどういうふうにしていくことで、お子さんを受け入れられるのかっていうことを考えて進んでくれたなと。」

<家族はなかなか子どもを返してくれないことで不本意な点もあったと思いますが、それでも児童相談所と「協働」できたのはどうしてでしょうか？>

「ほんとに、あそこをマッピングしてセーフティ・ミーティング重ねてって言う、そういうやりとり重ねていくことで、主体者になっていってくれたっていう印象があります。」

<そこでは、何が起きたのでしょうか？>

「やっぱり、心配していることが共有できたし、それを扱っていく上で、本人のそういう普段の生活面とか学習面とか、そういったこともそうなんですけども、家族でお話をしていくって言うところが、あの家はほんとにセーフティ・ミーティングの中で、家族の時間、家族で話し合う時間を設けて、私たちはそこから退席してっていうことを重ねた中で主体者に・・・。そういう格好からって言うのは変ですけども、そういった時間とか場所とか機会とか具体的なもので取り組みを、自分たちがって言うふうに取り入れていくきっかけになったような印象があります。」

「この〇〇さんのときに、・・・私は返さないって誓っているんで、すごく葛藤があったんですけども。そこをお母さんには反省、すっごいしてほしいし、お父さんにも『そういう

ことに、お母さんが至っちゃったのはお父さんのせいよ』っていう、そういうことをすごく気付いてほしかったし、っていうところでは、今でもそこはもや(もやもある)……。葛藤もあったりするんですけども、最後に家族で来て、うち(児童相談所として)」はもう終了っていうところで、もう、それでも、ちょっと丁寧に、本人も児童相談所にまだ通って来たいって言うんで、ちょっとしばらく来てた時期のセーフティ・ミーティングを経て、最後の最後にお姉ちゃんが、「もう家族で話し合っている」っていう、何かあっても家族で話し合いながらいけるっていうふうに言ってくれたんですね。『ほんとにお世話になりました』みたいな。あ、そう、『バラバラだった家族が今は一緒に生活して、これからは、一緒に生活して話し合いをして、これから何かあっても話し合い、話ができると思う』っていうふうに言ってくれたところで、やっぱりそこが一番大切なのであって、お母さんやお父さんをとっちめることではないんだなっていうところがすごく、何ですかね、ちょっと、何か変な言い方ですけど。『あ、これが、このために家族に主体的にやってもらうっていうことは必要なんだな』っていうふうに、ちょっと、私の中では・・・」

担当者は、本児が長期間にわたってお母さんに連れまわされ、学校にも通わされない状況について両親に対し憤りを感じながらかわりが始まったことを率直に話してくれた。そして、セーフティ・ミーティングによって、家族との対話が継続される中で、やがて、支援者の役割は家族の責任を問うことではなくて、家族が主体者となれるための支援こそ大切なんだと述べている。

以上